



小学生と高齢者で「三永のみんな でゆるスポーツを楽しもう会」



しゃもじ型「おにぎりホッケー」スティック



「お土産リレー」落とさないよう運びます

当日：

2月24日（火）には、当センターから教員が小学校を訪問しました。児童45名が高齢者15名を出迎え、8チームに分かれて、4つのコートで3競技「お土産リレー」「おにぎりホッケー」「柿玉入れ」を行いました。ホッケーのスティックはあえてサイズをバラバラにし、競技者の多様性を反映させました（児童聞き取り）。最初は説明もたどどしく、ぎこちない雰囲気でしたが、次第に白熱して歓声も上がりはじめ、3競技はあっという間に終わりました。

児童の聞き取りからは、競技について質問されて戸惑ったり喜んだりしたこと、思いのほか機敏な高齢者に驚いたこと、勝ちたくてルール違反をしたりゴールを自分で決めたいがる児童がいる一方で、高齢者がゴールできるようサポートする児童もいたことが分かりました。一方、高齢者の聞き取りからは、高齢者がプレーしながらルールを理解し、ときに夢中になって楽しんだことが明らかになりました。とくに最後の競技にきて、たがいの交流も深まった時点で、「小学生と高齢者がいっしょに風船を投げると高得点」という設定があり、それが楽しさを増幅させたことが分かりました。

総じて、小学生が考えた競技だったこともあり、最後までルールが伝わっていなかったり、用具の不具合が起きたり、その場でルールが変更されたりと、競技として未完成な部分はありました。しかし、未完成だからこそ、ユニークな協働——子どもたちが伝えたい気持ちや勝ちたい気持ちを強く発し、それに応えて高齢者もプレーヤーとして動き、ともに手探りしながら競技をなんとか成立させる——が現場で起きたのだと、調査チームはとらえました。

このように今回の競技はレクリエーションの要素が強く、笑いながら交流が進みましたが、一方で、もし競技として完成していて、チーム対抗で競うスポーツの要素が強くなった場合、どうなるのか。高齢者と小学生という経験や動作が大きく異なる集団であれば、たがいを気にしあい、通常のスポーツのように先鋭化はしないのか。今回得られたデータを詳細に分析して、研究を続けていきます。

「おにぎりホッケー」

石門ゴールにおにぎりボールを転がす



「柿玉入れ」柿に見立てた風船を入れます

